



日本とカンボジアの地域精神医療

途上国の精神保健を支えるネットワーク(SUMH)理事長 青木 勉

小鳥のさえずりが春の到来を告げていますが、会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。当会の理事をされている窪田彰先生が編集された『多機能型精神科診療所による地域づくり』が出版されました。私も拙文を寄稿していますが、先生が提唱されている多機能型多職種チーム医療による地域づくりが副題となっています。錦糸町モデルや日本各地での地域精神医療モデル、そしてイタリア・トリエステ、カナダ・バンクーバー、イギリスの地域精神医療モデルについても取り上げられています。当会がカンボジアで現在行っている精神科サービスの活動は、まさしくこの本のテーマに基づいたものです。ですから、日本における地域精神医療の実践を学ぶことは、国際精神保健にも大変有益であると言えるのではないのでしょうか。会員の皆様にも是非、御一読をお勧めする次第です。

特集 2016年3月 SUMH スタディツアー

I SUMH スタディツアーとカンボジア精神保健状況について
手林 佳正

スタディツアー参加の感想
スタディツアー参加の感想

篠原 慶朗
長橋 由実香
細田 知佳

II 2016年3月 SUMH スタディツアーの概略

宮本 圭

III スタディツアー参加者からの声

スタディツアー(ST)に参加して 伊藤 由加里
カンボジア・スタディツアーからの学び 岡部 紀代子
スタディツアー参加の感想 岡村 実佳
スタディツアー参加の感想 柏木 素直
スタディツアーに参加して～現地でみたたくさんの笑顔～

IV SUMH 総会のお知らせ
編集後記

丸谷 俊之

発行：途上国の精神保健を支えるネットワーク
Supporters for Mental Health ; SUMH

I SUMH スタディツアーのカンボジア精神保健状況について

手林 佳正

1. 概要

2016年3月6日夕から10日夕までの4泊5日、シュムリアップ空港集合解散で、7名の参加者が、手林が全体コーディネイトし、宮本圭さんと篠原慶朗さんのアシストと、SUMHカンボジアの現地代表 Tey Pisal とスタッフである Kroch Vannak の現地調整でスタディツアー(ST)を行った。

2. カンボジア精神保健の新しい情報収集

手林は、2日から首都プノンペン、ST終了後一日をシュムリアップにいて、最新の精神保健情報を収集した。

精神科医師数(54名?)と精神科外来診療を行う医療機関(政府によると275カ所?実際は15カ所?)はいずれにしろ拡大している。

医師養成大学は2校となり、私大医学部ができています。

入院設備は Khmer- Soviet Hospital の10床程度のみ。ここの精神科外来(OPD)は一日400人を超える受診者数で大混雑だった。

保健省には Department of Mental Health が新設されて、Dr. Chitt Sophal が Director としてリー

ドしている。

児童精神科は、20年を超えて駐在を続けるインド人医師 Dr. Bhoomi Kumar のもと、Caritas の支援を受けた CCAMH (Centre for Child and Adolescent Mental Health) がタクマウにある Chey Chumneas Hospital 内で公的保健制度の中で継続中である。

精神保健関連の非政府組織 NGO としては、Dr. Chhim Sotheara が代表の TPO (Transcultural Psychosocial Organization) は公的保健制度とは別に、職員数を100名余から70名に減らしたが、心理教育や外来診療などで活躍中。ほかに SSC (Social Services of Cambodia) がある。ちなみにこの団体には著者は JICA 専門家として2001年頃に集団療法技術移転を行った経緯がある。

なお精神科リハビリテーション(通所)を行っているのは SUMH のみである。

3. シュムリアップ SUMH の現在

シュムリアップ referral 病院内に韓国支援で新築された5階建ての Maternal 棟の1階ロビー右側に、糖尿病専門外来と並んで、精神科外来2診があり、そのカウンターに囲まれたフロアで、診療を終えた外来者と家族10数名を対象に心理教育を行っている。現在は場所的制限から話し合い以外の通所活動は行っていない。病院内の別の建物(旧検査棟?)に移る可能性があるとして Pisal は説明している。

Pisal 以外の職員は、2年前より Vannak プライマリー看護師、前に在籍していた人とは同名の別人の2名が常勤の支援スタッフ。

アンコールチュム保健区病院(同行した11日には80名外来、うち6名が新ケース)、クララン保健区病院での精神科診療は、SUMH の支援で隔週で継続されている。医師を Pisal のクルマで同伴し、現地では受け付けは現地病院看護師、Pisal は受付調整、Vanak は新患インテイクをしていた。

シュムリアップのレンタカー運転手は道の悪いアンコールチュムには行きたがらないので、Pisal が出すことになったと言う。

ヘルスセンターのフィードバックコミティメンバー9名+スタッフ2名を対象にして、精神科受診勧奨について、アルコール依存を例に Pisal が説明して、のちに自由討議する機会に同行した。これをキーパーソンミーティングと称していて、プロジェクト当初の位置づけとはずれてきていることを知った。

Pisal は、年齢と健康があり前ほど頑張りがかきかないので Vannak に仕事を譲っていきたくないと漏らしていた。Vannak には、カウンセリング研修コース(TPO

が首都で行っている)の受講を勧めた。

注1; フィードバックコミティとは、ヘルスセンターがカバーしている村落から選ばれた人々が無償でヘルスセンターの活動の情宣や建物の維持などを行う委員会。日中に仕事を離れて参加しなければならないため、名誉ではあるが、不承不承という側面もある。

注2; キーパーソンミーティングは、1999年からSUMHの地域精神保健活動の一つの軸として、緊密な人間関係が維持されている地域社会の中で、ケアしている患者と家族を孤立させず、差別されず、近隣から理解され、支援を受けることができるように、地域の隣人やリーダー、教師や僧侶などのキーパーソンに集まってもらい、茶菓を提供して和やかな雰囲気の中で、説明と自由討議を行うことで心理教育を進め、障がい者を受容し共に生きる地域社会の雰囲気や文化を作っていこうとしたもので、当面の支援策を共有することも目指して行ってきたもの。

4. 州内の SUMH 評価

ヘルスセンター代表から、またフィードバックコミティメンバーから、講師であった Pisal に、このような心理教育の機会を増やしてほしいと要望があった。筆者が駐在していたときは、NGOに集められてしまった、というような雰囲気が強かったので、こうした主体的な参加には驚いた。社会の安定、維持欲求の充足したカンボジアの現状が背景にあるのかもしれない。

5. やり残し

Dr. Sophal やシュムリアップ州保健局長、JICAカンボジア事務所の保健医療福祉担当とは日程調整ができず会えなかった。



写真1 シュムリアップ・メンタルヘルスリハビリテーションセンター: SUMHカンボジアの職員により、

シュムリアップ州立病院精神科外来患者の通所利用者に対して、心理教育を行っているところ。



写真2 Sasar Sdam ヘルスセンターのフィードバックコミッティーを対象として、心理教育を行っているところ。

II 2016年3月SUMHスタディ・ツアーの概略 ツアー運営補助 宮本 圭

2016年3月のスタディ・ツアーを運営側として振り返ってみたいと思います。

ツアー開始前、手林らは首都プノンペンで、Khmer Soviet Friendship Hospital の精神科外来・病棟、精神保健分野のNPO二つ、Transcultural Psychosocial Organization (TPO) と Center for Children and Adolescent Mental Health (CCAMH) を表敬訪問しました。精神科外来では激増する受診者の現状を、TPO や CCAMH では資金繰りを工夫しながら継続している活動について情報交換・議論をしました。首都から離れて活動するSUMHだからこそ、こうしたネットワークを大切にする必要があると再認識した首都滞在でした。

3月6日、いよいよ参加者を迎え、シュムリアップでのツアーを開始。ツアー導入部分にカンボジアの医療保健全般と精神保健事情、SUMH についての講義を導入。その後は、定番の Siem Reap Referral Hospital 視察や市街地に住む利用者の訪問、カンボジアの伝統治療体験に加え、Kralanh 保健区病院視察と外来利用者訪問、キーパーソン・ミーティングの参加を行いました。講義を導入したことでカンボジアの医療保健の概要を理解の上、病院視察・利用者訪問となりました。利用者訪問や治療僧のいる寺院周辺に形成されていた患者・家族のコミュニティ訪問では村での人々の生活を知ると共に、今も西洋医学と伝統治療が共存するカンボジアの保健医療を

肌で感じて頂く機会となったようです。また、キーパーソン・ミーティングでは地域における精神保健サービスのニーズの高さ、SUMH の活動への要望も感じて頂きました。

暑いカンボジアの5日間、事故も怪我もなく、無事にツアーを終了できたのは、参加者の皆さまのご協力のおかげと感謝しています。今回は皆さんの体力・気力に助けられましたが、3月初旬のカンボジアの暑さが体に堪える方もいるとわかりました。ツアー時期も含めて検討を重ね、SUMH・ツアー参加者双方にとって、今後さらに良い出会い・学びの機会としていきたいと思えます。最後に改めまして、ご参加頂いた皆さまに心よりお礼を申し上げます。

III スタディツアー2016 参加者からの声

2016年3月6日（日）～10日（木）に実施されたスタディツアーには、看護師、保健師、精神保健福祉士、看護学部学生の方々にご参加いただきました。今回参加された皆様から、ご感想を寄稿いただきました。ツアーの様子や楽しさ、そして学びの多さがよく伝わってくる報告です。是非ご一読下さい。掲載の順序はお名前の五十音順です。

スタディツアー(ST)に参加して

看護師 伊藤 由加里

今回のSTでは、SUMHの活動や医療機関見学だけでなく、家庭訪問の同行でカンボジアの一般家庭の生活を見ることができたり、ローカルの食堂で昼食を食べたり、市場に行ったり、現地の人々の生活体験ができたことで、カンボジアをより身近に感じ、非常に楽しいSTでした。

医療機関見学では、SUMHの活動内容と共に精神科領域の治療の実際、一般的な医療事情を垣間見ることができ、家庭訪問同行では、症状が改善した本人の様子だけでなく、家族も含めて生活が改善した様子や、他者の訪問途中にスタッフを見かけた患者家族から訪問を依頼される場面など、SUMHスタッフの活躍と信頼されている様子を知ることが出来ました。

私は、中南米で8年ほどの駐在経験があり、文化、習慣、宗教の違う中南米とカンボジアで医療事情に差があるのか、興味がありました。中南米でも、自国の大学に医学部がない国は多く、医師の数は先進国と比較が少ないため、地方でのヘルスポストの役割や使用医薬品の内容などはカンボジアと似ていると思いましたが、中南米では、公共の医療機関で大

きな手術などをするとき以外、無料診察という考え方が身につけているため、今回シェムリアップで見学したヘルスポストで、患者に診療費を一部負担してもらい制度を導入しても一定の利用者が定着している状況は新鮮で、これは国民性の違いが関係しているのではないかと感じました。滞在期間が短く、印象程度で分析までには至りませんでした。地域での医療事情の違いに触れる良い機会となりました。

また、占いで多くの物事を決めている習慣や医師が少ない中で伝統治療師クルクメールと治療僧を頼りにしている様子は、興味深く見学させていただきました。

工夫を凝らし準備をして下さったスタッフの皆様、見学の協力をして下さった現地の皆様に感謝致します。

カンボジア・スタディツアーからの学び 訪問看護ステーション コスモス 岡部 紀代子

今回のスタディツアーでは、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

私は、中央アフリカ共和国での医療活動などを行っている NGO に所属しております。現地に行くと、明らかに精神疾患を患っているであろう人を見かけますが、日々の生活や身の安全が保障されていない現地での精神医療は、遅れているように見えます。

また、中央アフリカは内戦国であり、内戦が精神衛生に与える影響も垣間見えます。同じように内戦国であったカンボジアでは、どのような精神保健医療が行われているのか、また内戦の精神衛生への影響とその支援がどのように行われているのかということに興味を持ち、スタディツアーに参加しました。

まず驚いたことは、病院での活動だけではなく、そこから地域の拠点となる保健センター、さらにコミュニティへと活動範囲が広いことでした。地域住民が必要な時に必要な医療にアクセスできるためには、どうすればいいのかが明確になっている必要があります。ここでは、各コミュニティ内に情報伝達などの役割を持ったキーパーソンもいるため、細部にわたる情報伝達が可能となり、広範囲にわたる活動ができるのだらうと思いました。

また、いくつかのお宅に家庭訪問させていただきました。どのご家族も、患者さんを温かく見守って一緒に生活されていることが印象的でした。伝統医療を受けられる場所でも、患者さんとともに家族と一緒に過ごしていました。日本では独居の方が多い地域での訪問看護をしているので、家族を大切に生活しているこの国がなんだかうらやましく感

じました。
このスタディツアーで、患者さんを看る時、身体面だけではなく、精神面・社会的背景なども含めたアセスメントが大切であることに改めて気付きました。今回体験したことを、今後の仕事や NGO での活動に活かせるといいなあと思っています。どのように活かしていくかは、これからの課題にしたいと思います。

最後に、今回のスタディツアーでお世話になった方々に感謝致します。ありがとうございました。

スタディツアー参加の感想 新宿区牛込保健センター 保健師 岡村 実佳

海外で活躍する NGO 団体に興味があったこと、しかも舞台は憧れのアンコールワットを持つシェムリアップ！スタディツアーに参加しない手はない。

盛りだくさんで様々な経験ができたのは、手林さんをはじめとする SUMH の長年培ってきた実績があるからだろう。シェムリアップとクラランという都市や田舎での活動をはじめ、実際の患者さんへの訪問、治療僧の伝統治療などを通じ、カンボジア住民の生活や文化なども垣間見ることができ新たな価値観に触れた貴重な5日間となった。と同時に、Dr. ホフのカンボジアでの精神保健支援を継続して SUMH として活動されている手林さん方の源となるのは何なのか、興味を抱いた。

というのは、途上国で常にプラスの方向に先進国の人々が働くわけではないからだ。充実感でツアーを終えたカンボジア出国前日、二つの出来事を目にした。一つ目は、リーズナブルなマッサージ店にて。所狭しと椅子が並べあり、多くのお客が入れる作りだ。現地スタッフは手を休めることなくせつせと働き、その腕前は素晴らしかった。店のオーナーは西洋人。スマホを片手に動画を見たり遊びながら、現地スタッフの様子を監視している。時折、彼らに怒鳴り散らして威嚇している様子に呆気にとられてしまった。二つ目、夜の10時頃、ツアー1日目に皆で見学したシェムリアップ州病院を通りすぎた。バーやクラブのネオンと爆音が夜の病院内を響き渡っていた。昼間は、病院の外に患者さんの家族がおり、看病や炊事や洗濯をし、共に助け合う姿が垣間見え、暖かい雰囲気のある場所であったのに、そのギャップに驚いた。爆音の中患者や家族は寝ているのだ。
途上国への支援とは、何なのか。自分がお金儲けできれば、楽しめればよいと思っている人がいる反面、地道に現地のためを思って活動している人がいる。これからも SUMH の活動が継続され、現地の一人

でも多くの方の支援になることを願っています。貴

と感じました。

4泊5日という束の間のスタディツアーではありますが、上記の訪問先に加え、クメール織物の工場やアンコールワットの見学等、充実した時間を過ごしました。また機会があれば足を運びたいです。期間中にお世話になった方々へ、また、貴重な意見



重な体験をさせていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

スタディツアー参加の感想

日本福祉大学大学院 柏木 素直

現在、札幌市の精神科病院のデイケアで精神保健福祉士として勤務をしています。また、昨年度は通信制大学院に入学をしたこともあり、今までとは違う新しい視点で精神保健を学ぶ機会に恵まれました。それがきっかけで、偶然に辿りついたSUMHのホームページにてスタディツアーが開催されることを知り、この度は参加を決めました。

出発までの連日、氷点下10度を記録していた厳冬の札幌を旅立ち、シェムリアップ空港に降り立った瞬間、身に纏う熱帯の空気には体がふやけるかのような感覚を覚えました。

スタディツアーでは、SUMHの活動先である病院内の見学やデイケアへの参加を皮切りに、家庭訪問、そして、伝統治療師(クルクメール、僧侶)のもとを訪れ、実際にカンボジアでの精神保健の様子を垣間見ることができました。一番印象に残ったのは、伝統治療師がいる寺院を尋ねた時のことです。寺院の敷地内には、長期間に亘り滞在をして、伝統治療を受けている当事者とその家族たちがおり、観光旅行では見ることができない貴重な生活の様子を目にすることができました。我が国は物資に溢れていますが、途上国では様々な格差があるために、精神保健だけではなく保健医療全体の問題としても、直接それらの影響を受けています。収入面からも病気になった時には迅速な治療が受けられず、さらに健康を害する為に悪循環となります。そのような中で、伝統治療は人々の身近な存在であり、且つ癒しであり、また、社会資源としての一端を担っているのだ



や資料を提供してくださった運営者の皆様へ改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

スタディツアーに参加して～現地で見たたくさんの笑顔～

医療法人社団草思会 篠原 慶朗

私が初めてカンボジアへ行ったのは2009年11月に実施されたSUMHスタディツアーに参加したのがきっかけだった。その時のツアーは、環太平洋精神科医会議(Pacific Rim College of Psychiatrists)とタイアップしていて、SUMHの現地活動のみならず途上国での精神保健の課題と現状を知ることができた。カンファレンスではSUMHの現地代表Mr. Pisalも事例発表をしていたことが思い出される。当時の私は自分がSUMHの活動に参加するとは思ってもいなかった。

それから6年後、私はSUMH事務局担当として今回のスタディツアーに参加した。前回の訪問とはいはSUMHのスタッフとしてカンボジアSUMHの活動をみることとなった。正直、6年前とはまるで違っていた。毎月の定例会議で気になっていることを、現地に足を運んでひとつずつ確認していく。わずか5日間であったが、現地の人々の生活の様子やカンボジアSUMHの活動の様子をみながらカンボジアのスタッフと会話をする中で、そうだったのかと気づくことばかりだった。あまりにたくさんの情報をキャッチしたせいなのか、帰国後もしばらくの間、気持ちはカンボジアに残っていた。

それから1か月経ち、記録写真を通して現地の様子

を振り返ると、カンボジアSUMHの現地活動の場にたくさん笑顔があったことに気づく。例えば、シュムリアップ州病院内SUMHカンボジアが活動している精神保健センターでデイケアに参加していた患者さんたちの笑顔。家庭訪問時に現地スタッフと話している時の患者さんの笑顔。クララン保健区病院の外来診療を見学した際に待合いでいた場所にスタッフが入っていた時にみられた患者さんたちの笑顔。どの笑顔も自然体で「会いに来てくれて嬉しい」「話をきいてくれて嬉しい」といった喜びの感情が伝わってくる気がした。これらはカンボジアSUMHが日々積み重ねてきた地域活動が信頼されていることの証しだと私は思う。そして、会員の皆様の支えがあってこそこのSUMHの活動なので。今回のスタディツアーへの参加後、支援を続けていくことの必要性を強く感じるようになり、今後もこの活動を継続すべく事務局として頑張りたいと思う。



写真：精神科外来待ちの患者さんたち（クララン保健区病院にて 2016. 3. 8）

スタディツアー参加の感想

長橋 由実香

今まで私は途上国の医療などについて考える機会がほとんどなく、スタディーツアーを通して、カンボジアの精神保健医療福祉の現状、看護職の役割・機能を、実際に現地の文化・価値観に触れつつ、学びたいと思い参加しました。どの経験も新鮮で印象的でありましたが、その中でいくつか感じたことを述べさせていただきます。

まずは看護職に求められる能力についてです。今までの学生時代の実習を振り返ると、高度な医療機器を用いた診断に頼りがちになり、実際に患者と接し、フィジカルアセスメントをする経験が少なかったように感じます。このツアーを通して、まずは看護職として、身体をしっかりと診ることのできる能

力、つまり、医療機器がない場所であっても、訴えや身体に表れている症状・反応からの確にアセスメントできる能力が重要であり、身体をしっかりと診ることで初めて一人一人の日常生活を踏まえて最善を考えることにもつながるのだと痛感しました。

次に、家庭訪問に同行した時に感じたことです。家庭訪問では、スタッフが訪問に来ることを1時間以上も待っていた方、訪問に対してどう思うかという質問に対して、「ハッピー」と答えた方、「訪問に来てほしい」と自主的にスタッフに伝える患者の家族の方にお会いしました。SUMHのスタッフと患者・家族との間には、上下関係ではなく、信頼関係が築かれており、現地の人に必要とされているのだと改めて実感し、感動しました。また、この時に、文化、伝統など全く異なった他国の人と信頼関係を築くには、何が大切であるのかと疑問に感じました。このことに対して、私がこのツアーを通して気づいたことは、「役に立ちたい」とその人を思う気持ち、一人一人が生きてきた文化的背景を十分に知ること、様々な価値観・伝統があり、どの文化や価値観も全て価値のあるものと理解した上で目の前の人から学びたいという姿勢、一般的に良いとされている方法をそのまま適用するのではなく、臨機応変に柔軟に対応することが大切であるのではないかと考えました。まだ自分が気づくことが出来ていないことは多



いため、今後、実践を通して改めて考えていきたい
と思います。

最後になりますが、今回のツアーは、自分の将来
のキャリアについても考える貴重な経験となりました。
大変充実した時間を過ごせたことに感謝申し上げ
ます。本当にありがとうございました。

スタディツアー参加の感想

千葉大看護学部4年 細田 知佳

私がこのスタディツアーに参加すると決めたのは、
ツアーの開催が大学の春季休業中であり、漠然と「ど
どこか旅行に行きたい」と考えていた時、教員から誘
いを受けたからです。一般病棟で看護師の臨床経験
があり精神疾患を持つ患者さんとも多く出会ってき
ましたが、カンボジア以前に日本の精神科医療の現
状すらよく知りませんでした。しかし、病院訪問、
家庭訪問などを通し海外の現地医療を体験できる
という点に惹かれ、参加を決めました。

現地に着く前は、発展途上国であるカンボジ
アの現地医療の現状を知り、医療従事者としてどう
支援ができるかを学ぶ機会になると考えていました。
しかし、実際にSUMHの現地での活動に参加し現地
の医療に触れることで、途上国の医療から日本が学
ぶことも非常に多くありました。もちろん、カンボ
ジアは人材や資源も少ない国で、他国の支援を多く
受けており、精神医療に関しても多くの患者さんが
支援を求めている現状があります。しかし、現地で
活動する医療従事者も多く知識や技術を持ち、そ
の力を最大限に発揮していることを、現地に行き初
めて知ることができました。同じ看護師でも日本と
カンボジアでの役割も大きく異なり、機器の少ない
中でのフィジカルアセスメントや状態の判断など、
日本の看護よりも高度な技術も多くあると感じ衝
撃を受けました。

また、SUMHが現地の患者さん達に信頼されてい
ることを実感し、その関係性が精神科医療にとっ
ては重要な点ではないかと感じました。それはSUMH
が現地の文化や歴史をよく理解しながら、現地のス
タッフや住民、患者さんと共に精神科医療の体制を
創り上げてきたからだだと思います。こうした活動
から、日本の精神科医療も学ぶことができると感じ
ました。

今回のスタディツアーでは、私が今後医療従事
者としてどう活動していくべきか、ヒントを得られ
たと思います。日本の看護師の役割や周囲の関係者
との連携、また、精神科看護にも目を向け、カンボ
ジアでの体験を日本での実践につなげていきたい



す。

IV SUMH 平成28年度総会のお知らせ

事務局

来る6月26日午後、錦糸町北口ビル(錦糸町ク
ボタクリニックのある建物)5階、錦糸町小ホール
にて、平成28年度総会が開催されます。

お忙しい折とは存じますが、今後の活動を考える
上で重要な会になると考えられますので、是非ご出
席賜りますようお願い申し上げます。

詳細はご案内のチラシを御覧ください。

SUMHの会員として、また寄付金によって一緒に途上国の精神保健を支えてください。

【年会費】一般 10,000円 賛助・学生 5,000円

編集後記

ニュースレター45号は、2016年3月のスタディツアー特集でした。

ご参加いただいた皆様の感想を拝読して、私自身が最初にカンボジアのSUMHの活動を見に行ったときのことを懐かしく思い出しました。日本にいと薬でも治療法でもなんでも新しい方がよい、という考えが当たり前のようになってしまっています。しかし、シエムリアップに行って一番衝撃的だったのは、限られた資源でもここまで患者さんを救うことができる、ということでした。エッセンシャルドラッグという言葉もそのとき初めて知りました。フィリップ・ピネルではないですが、自宅の敷地内で鎖に繋がれて精神運動興奮の状態にある患者さんにも出会うことができ、SUMHの介入によって治療に結びつき、後に自ら通院し落ち着いて生活できるようになったことを現地スタッフより写真付きのメールで報告を受けました。

スタディツアーの意義は、何と言っても百聞は一見に如かず、ということだと思います。今回ご参加いただいた皆様にも、現地の活動に直に触れていただいたのは、手前味噌ながら大変有意義な体験であったものと信じております。支援の裾野を広げるためにも、今後もスタディツアーを定期的に開催できるとよいと考えております。

また、幸い今井基金は2年目も継続して獲得することができ、現地調査研究の継続ができております。こちらの経過については、次号で報告があると思います。

今後とも皆様からの熱いご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

編集担当 丸谷 俊之

SUMH日本事務局

〒130-0013 東京都墨田区錦糸3-5-1

錦糸町北口ビル

TEL 03-3812-0736

HP: <http://www.sumh.org>

Mail: info@sumh.org

SUMH Cambodia

Mental Health Rehabilitation Center,
in Siem Reap Provincial Hospital,
Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia

Postal Address:

P.O.Box 93102 GPO Siem Reap Angkor, Cambodia

【会費・寄付金の振込先】

銀行振り込みの場合

銀行名:楽天銀行 第二営業支店(支店番号252)

口座名:特定非営利活動法人 途上国の精神保健を支えるネットワーク

口座番号:普通 7385345

郵便振替の場合

加入者名:途上国の精神保健を支えるネットワーク

口座番号:00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・E-mail・会費と寄付金のいずれか・SUMH へ一言を明記の上、お振り込み下さい。

☺ 入会、ご寄付のお願いです ☺

SUMHは、現地保健局への地道な働きかけにより、2105年7月から患者さんの診察1回あたり1ドル(現地通貨で約4,000リエル)の収入を現地法人が得られる仕組みを作ることができました。最終的に現地法人が自立するための最初の一步を踏み出すことができたと言えます。

しかし、当面は日本からの援助を継続していかないと、現地の精神保健活動を持続することができません。そのため、皆様のご支援が必要です。ぜひ入会をご検討ください。

また、寄付金控除対象団体となるよう認定NPO法人化に向けた作業を進めてはありますが、まだ実現に至っていません。そのため、寄付していただいても寄付金控除の対象となりませんが、カンボジアの患者さんの笑顔を思い浮かべていただいて、当法人にご寄付いただけると、大変ありがたいです。何卒よろしくお願い申し上げます。